

日中合同会議 2007年度

はじめに

2006年10月27日、京都大学大学院教育学研究科と中国の中央教育科学研究所との間に学術交流の協定が結ばれ、2007年1月28日には日中教育共同研究センターが設立された（センター長：京都大学大学院教育学研究科教授・田中耕治）。本センターでは、日中両国の間で問題を共有し、限定的かつ具体的な研究課題に一つひとつ取り組んでいくことで、両国の教育研究・実践の進展に寄与する成果を着実に蓄積しつつ、息の長い学術交流の実現を目指し、共同研究を進めている。

2007年度、日中教育共同研究センターでは、日中の小学生の数学学力を対象とする比較調査の実施に向けて、2007年の6月（於中国・中央教育科学研究所）と12月（於京都大学）に日中合同会議を開催した。この比較調査では、両国の算数・数学教育における理論的・実践的問題をふまえ、内容を絞って共通調査を実施する予定である。これにより、両国の学力形成上の課題や実践改善の指針を具体的に示し、現場にフィードバックしていくことを目指す。

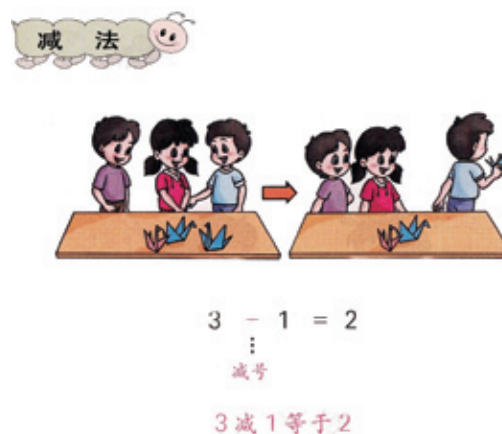
すでに2007年1月28日のセンター設立の協定締結直後に、日中合同研究会を開催し、双方の学力調査の実施経験や理論的知見を交流した。そして、3月9日には、調査問題を作成する前提作業として、両国の教育課程基準や教科書の検討を進めるべく、京都大学の研究チームにおいて定例研究会を立ち上げた。定例研究会には、学内外の教育学、心理学、算数教育の専門家11名が参加している。ほぼ毎月行われるこの定例研究会では、日中合同会議に向け、ひき算、かけ算の指導方法など、具体的な素材を取り上げて検討を続けている。

1. 日中合同会議（6月）

2007年6月に中国の中央教育科学研究所を訪れ、25日と26日に日中合同の研究会を開催した。25日の研究会では、日本側からまず、「日本における授業研究の特徴」（教授・田中耕治）により、日本の教育の特徴と授業研究の歴史が紹介された。次に、「ひき算、かけ算の日中教科書比較」（学部生・大下卓司）では、ひき算やかけ算に関わる両国の教科書の記述から、計算の意味を重視して単元を構成する日本に対し、数の操作を重視して単元を構成する中国という相違が報告された。「日本の算数の授業風景」（助教・石井英真）では、授業のビデオを資料として示しながら、かけ算の量的意味や日本の授業の特徴を論じた。

一方、中国側から、中央教育科学研究所の陳曉東先生により、「遼寧省における小学生の数学学力調査」と題する報告が行われた。同調査は中国の課程標準改訂に向けた調査であり、これまで学力調査があまり実施されてこなかった中国における貴重な事例が紹介さ

れた。同会議では質疑応答の時間を設け、「日本ではかけ算やひき算の計算の意味を重視して教科書を書いているが、子ども達も意味の違いを自覚している必要があるのか」といった質問がなされるなど、活発に意見を交わした。



▶中国の算数教科書

（出所：『数学 第一学年』人民教育出版社p.26）

26日の研究会では、「第二次世界大戦後の学力問題・調査と今回の全国学力・学習状況調査について」（田中耕治）において、4月に行われた全国学力・学習状況調査の具体的な資料を提示しながら、日本の学力調査の動向や、そこから見える今後の課題について論じた。また、「国際学力調査のあり方」（助教・楠山研）では、PISA2003を事例に、国際学力調査の動向や各国の反応について報告した。こちらでも、質疑応答がなされ、実りのある議論ができた。



▶田中耕治先生の発表

帰国後、毎月の定例研究会にて6月の日中合同会議の反省、及び12月の日中合同会議に向けて議論を重ねた。

2. 日中合同会議（12月）

同年12月に中国の中央教育科学研究所の先生方をお

招きして、第二回日中合同会議を開催した。中央教育科学研究所から、田輝先生、高峽先生（課程教学研究部主任）、胡軍先生、項純先生、李鉄安先生、孔凡哲先生（東北師範大学・教授）にお越しいただいた。4日の午前中には、日中教育共同研究センターと京都大学グローバルCOEプログラムとの共催で、「PISA調査の特徴と課題 — 日中合同研究会」を、午後には日中教育共同研究センターと教育実践コラボレーション・センターとの共催で、シンポジウム「日中教育課程改革の動向」（詳細は後述）を開催した。

午前の研究会では、京都大学の楠見孝教授により、認知心理学の立場から「PISAの経験と日本」と題する報告がなされた。続いて、京都工芸繊維大学の内村浩准教授により、科学教育の立場から「国際学力調査から見えること — 科学的リテラシーを中心に」と題する報告がなされた。これらの報告から、PISA調査はどのような教育の方向性を求めているのかがクリアになった。



▶楠見孝先生の発表



▶内村浩先生の発表

他方、中央教育科学研究所の胡軍先生には「2006－2009国家重要課題 — 小中学生における学力調査研究の概要」というテーマで、中国の学力調査実施に向けた動きを報告していただいた。全体討論では、「学生の創造力の育成」について議論が交わされ、学力調査が抱える課題が浮き彫りになった。折しも、PISA 2006調査の結果が発表される直前であることもあって非常にタイムリーな議論となった。



▶胡軍先生の発表

12月5日には、中国の先生方とともに寝屋川市立田井小学校を訪問した。田井小学校では、5、6年生の歓迎セレモニーに迎えられた後、授業見学を行った。授業見学終了後、赤井悟校長や授業者の先生に同校の取り組みを説明していただいた。

田井小学校訪問後、京都大学大学院教育学研究科・烏丸キャンパスにて、日中合同会議を開催した。分数と体積の指導方法をテーマに、「分数・体積に関する教科書比較、及び授業実践の紹介」（学部生・大下卓司）を報告した。分数については、日本の教科書では分数を液体などの量として意味づけているに対して、中国の教科書では、割合や分割量として分数の意味を説明していた。続いて、東北師範大学の孔凡哲教授からは、「中国数学教育の動向、及び国際教科書比較」と題する報告がなされた。中国の数学教育の動きやビデオによる授業風景、そして、諸外国との幅広い教科書比較による各国間の違いが示された。



▶田井小学校での授業見学



以上が2007年度の日中合同会議の報告である。今後、2008年3月には中国を訪れ、中国の小学校の算数授業を観察する予定である。

（文責：大下 卓司）